

## 湯本地区の近代化炭鉱産業遺産群

### ① 常磐湯本地区の概説

湯本地区は常磐炭田地域の中枢をなした常磐炭礦があり、様々の施設設備等が集中し、戦後は昭和天皇が東北巡幸の際に入坑された第六坑など重要な施設が現存している。またここは、いわき地域での最後の採炭（昭和51年1976年）を行っていたところでもある。そのため、この地にあった旧常磐炭礦磐城礦業所跡地に昭和59年（1984）に、いわき市が「いわき市石炭・化石館」を建設した。

この礦業所を中心に背後にズリ山、平坦部に発電所や常磐炭礦礦業所事務部門、各坑口、石炭積み下ろし施設・万石、小野田炭礦からの鉄道路線や常磐線湯本駅、周辺に炭鉱住宅が密集する大炭鉱町が広がり、更に湯本温泉旅館が立ち並んでいた。その広く分布していた産業遺産・遺構は、湯本温泉地域の開発、アクセス道路の建設、炭鉱住宅の改築、河川改修工事等が進み、その多くが消滅していった。

また周縁地には小野田の炭鉱地区、磐崎の炭鉱地区等の坑口や関連施設等が小規模ながら残存している。

② 旧入山採炭株式会社・第六坑坑口  
産業／採炭坑口／いわき市常磐湯本町向田

昭和3（1928）年築造の煉瓦造りの旧・入山採炭（株）第六坑人車坑は昭和22年に昭和天皇が入坑し、地下450メートルの坪下（豎坑櫓下）で炭層やポンプ座等を経て昇坑したところとして著名である。昭和46年、磐城礦業所の閉山で閉鎖された。その一帯は「昭和の杜公園」として残されている。常磐炭田地域で坑口そのものが見られるのはこの地しかない状況で貴重な産業遺産といえる。現地はいわき市石炭・化石館敷地内にあつて保存されている。背後は常磐炭礦の採炭現場で、今はズリ山の形は殆ど見分けが付かなくなっているが、その麓に位置して坑口が設置されていた。



六坑坑口風景

③ 旧・入山採炭株式会社・第五坑  
産業／採炭用人道／いわき市常磐湯本町辰口

入山採炭（株）は大正6（1917）年、湯本第五坑、第六坑の開削用電力確保策として第五坑火力発電所建設に着手した。その竣工後、第五坑は坑内夫の入出坑に利用したものである。入山採炭（株）は磐城炭礦（株）と合併し常磐炭礦となったが、その磐城礦業所の閉山に伴い昭和46年、坑口は閉鎖された。立地点はいわき市石炭・化石館の北部に隣接しており、保存状態はいいものの、湯本川河川改修工事でフェンスが張られ近くより見学することができる程度である。



第五坑 坑口

④ 常磐炭礦磐崎砒石炭積込場（万石）  
産業／石炭運搬積出施設／いわき市



磐崎砒石炭積み込み場

石炭積込場は通称・万石といわれるが、それはかつて石炭採掘賃料単位が石高で計算された故事によるものと思われる。ここは輸送用貨車に採炭した石炭を積み込む場所であり、ここから専用鉄道で湯本駅まで搬送した。この周辺には選炭場や関連施設の遺構が多く残存している。

⑤ 常磐炭礦磐崎礦扇風機座  
産業／坑道通風施設／いわき市常磐上湯長谷町鳥館

磐崎礦坑道の風洞坑であり、坑道の点検 坑としても利用されていた。  
この内部に巨大な扇風機が設置され、二つの坑口の一つは排気用、一つは入気  
用として機能した。



扇風機座風景

## ⑥ 小野田炭礦施設群

産業／旧炭鉱施設各種／いわき市常磐上湯長谷町ほか

小野田炭礦は藤原川支流の湯本川上流、湯の岳の東山麓に抱かれるように幾つかの炭鉱産業跡地が残されている。ここから湯本駅に向けて引かれた軽便鉄道跡、蒸気巻上機斜坑跡、万石跡、独特の方式で配置された警察官派出所、坑夫等の墓地や殉難碑、現在は風化で劣化した石炭層の露頭、火薬庫、炭鉱産業集落の配置が伺える集落跡、山神社跡、演芸場跡、飯場跡、そして炭鉱住宅等である。

この小野田炭礦にはいわき地方で最初の鉄道が明治20年（1887）敷設され、小名浜港までの約13キロで延びていた（最初は馬車軌道であった）。明治29（1869）年に当地域初の小野田豎坑（深さ40メートル）が開削され、翌年、石炭の輸送を目指して常磐線が開通すると採掘も本格化した。明治40（1907）年には従業員1500名の炭鉱集落となった。



明治20年頃の小野田炭礦から小名浜港へ至る軽便鉄道の湯本地内のトンネル跡(約300メートル)

それらの人々は、職務階層ごとに仕分けされた専用住宅に集住した。湯本側左岸には役員等の職員住宅、クラブ、テニスコート等が配置されていた。この中にフェルト状の厚紙にコールタールを何層にも塗った屋根をもつもっとも古い形の炭住があり現住している。

## ⑨ 常磐地区のその他の関連施設群

### ■湯本山神社

炭鉱の祭りは山神様として一大イベントが繰り上げられた。祭りの当日は学校も休みとなって老若男女が相集って楽しんだ。しかし炭鉱の閉山とともに坑口毎にあった山神社は統合・合祀され、湯本地区のこの湯本山神社に一体化された。ここは今でも炭鉱後継企業の常盤興産株式会社が手厚く手入れと新年の参詣などで使用している。

(大谷 明)



湯本山神社風景

員が調査補助員として活動して制作した成果である。